

ト★ 東星学園だより

TOSEI

東京都清瀬市梅園 3-14-47 TEL 042-493-3201 <http://www.tosei.ed.jp>

□ 西武池袋線秋津駅 南口 徒歩 10分 □ JR 武蔵野線新秋津駅 徒歩 15分

vol. 9

こんな小石でも…

校長 大矢 正 則

今年はいじめての東星学園だよりをお届けします。皆様、本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

年が明けて一月程経ちますが、皆様はどのような年末年始をお過ごしになりましたか。私は、1週間ほどの休暇をとり、旧い友人たちと数年ぶりに再会し昔話に花を咲かせたり、自宅の何年も掃除していなかった場所の大掃除をしたりして、新年を迎えました。

映画館にも足を運びました。『オリエント急行殺人事件』は、迫力溢れる映像と、意外な展開が大変魅力的な映画でした。ところで、私が一番好きな映画は、大変古いのですが、『道』というイタリア映画 (F. フェリーニ監督) です。1954年の映画ですから、64年前の映画ということになります。私がこの映画をはじめて観たのは40年近く前ですが、今でも一番好きな映画です。DVD化されるとすぐに購入し、手元に置き何年かに1回は観ています。今年の初めにもこの映画を観ました。内容を詳細する紙面はありませんが、この映画には、貧しさゆえ家族のために大道芸人に売られてしまうジェルソミーナという女性が出てきます。ジェルソミーナはザンパノという名前の主人 (大道芸人) の言われるままに、太鼓をたたいたりラッパを吹いたり芸をしながら町から町へと旅を続けます。ジェルソミーナは買われた身ですから、すべて主人であるザンパノの言われるままに行動するしか許されていません。自由な時間などありませんから、好きなことなど何もできず、当然趣味などはありません。そんな人生ですから、生き甲斐など見つけようがありませんでした。

ある日、サーカスのピエロが、そんなジェルソミーナをからかうように近づいてきます。容姿のことなども含めピエロはさんざんジェルソミーナをからかいます。からかわれた後、ジェルソミーナは、「私は何の役にも立たない。いやだ。生きてることが嫌になった」と泣き出します。さんざん彼女をからかっていたピエロは、ここで意外なことに、急にまじめな顔になり次のように、ジェルソミーナに話します。

「おれは無学だが何かの本で読んだ。この世の中にあるものは何かの役に立つんだ。たとえばこの石だ」。するとジェルソミーナは「どれ?」と問います。ピエロ

は答えます。「どれでもいい」。そう言って、足下の石を一つ拾い上げます。そして続けます。「こんな小石でも何かの役に立っている」。するとジェルソミーナは「どんな?」と聞き返します。それに対してピエロは、「おれなんか聞いてもわからないよ。神様はご存じだ。お前がいつ生まれ死ぬか。人間にはわからん。おれには小石が何の役に立つかわからん。何かの役に立つ。これが無益ならすべて無益だ。空の星だって同じだとおれは思う」と答えます。

これを聞いてジェルソミーナは、にっこりと笑い、旅芸人として主人に仕えるという自分の生き方に意味を見いだしていきます。この後も、彼女には新たな悲劇が訪れるのですが、それはここでは書きません。しかし、ジェルソミーナの生き方が、最終的には奴隷使用のような主人であったザンパノにも大きな影響を与えてゆきます。なぜなら、ザンパノはジェルソミーナに愛されていたことに気づいたからです。

私たちは自分がいつ生まれていつ死ぬか知らずに、この世に生を受けました。そして、その自分にどんな人生が待っているのかもわからないまま生きています。しかし、どんな人生も、いのちも、個性も、何かの役に立っている。誰かの役に立っている。意味がある。人間にはわからないけれど、すべてをよし、益としてください。神様がいる。そのように考えて生きていくこと。そこにかけて生きていくこと。これこそが、一人ひとりに求められていることであり、そこに使命を持って生きる生き方が幸せな生き方なのではないか。私は、この映画を観るたびに確認し、また、歩き出す気持ちになります。

先ほどのピエロが示した小石の大きさや形、硬さが一つひとつ違うように、私たち人間の個性も一人ひとり違います。一人ひとりに、ひとつずつ固有の使命がある。そういった意味で、人は誰もが自分の人生の主人公です。

少し話が変わりますが、新年の大学箱根駅伝を観ていたら、CMで箱根駅伝のことを『脇役のないドラマ』と言っていました。人生も同じです。人が生きるということは、その人が『自分の脇役になることはない』ということです。私は自分の人生の主人公だという意識を持って生き、生活していきましょう! そして、周りの人の人生も尊重し大切にしたいものです。